いせきんぐ宗像
シンポジウム
２０１４講演録

パネルディスカッション

コーディネーター ：西南学院大学 非常勤講師　板橋 旺爾 氏
パネリスト ：学校法人旭学園 理事長　高島 忠平 氏
愛媛大学ミュージアム 准教授　吉田 広 氏
海の道むなかた館 館長　西谷 正 氏

（司会）それでは、これからは西南学院大学非常勤講師 板橋旺爾先生のコーディネートのもと、討論へと移ってまいります。それでは、板橋先生よろしくお願いいたします。

（板橋氏）皆様、こんにちは。今日は、田熊石畑遺跡の発見および絶大な成果をもとにしたムナカタ国と邪馬台国というシンポジウム、講演を頂きました。そのあとの討論を始めたいと思います。真ん中に九州説の高島先生がどんと座っているのは、主催者の宗像市教育委員会の何らかの意図があってのことかと思いますが、そういうプレッシャーにはかかわらず進行していきたいと思います。

討論では、少し時間が押してあまりありませんが、先ほどからの講演で弥生国家群の性格が出ておりましたので、まず、ムナカタ国の性格、どんな国であったかということを討論して、それから邪馬台国へ移りたいと考えております。

ということで、まず質問をこれからしていきます。講演の順ということでもありませんが、そうですね、吉田先生にですね、吉田先生の銅剣の刃の下の関（まち）部。あそこの穴の高さが、どうだ、こうだというあのグラフを見ておりますと、考古学者というのは何と細かいというふうに感じますが、まあそういう細かいところから天下国家を論じるというのが考古学でもありますので、まずその辺の銅剣のことから質問させていただこうかと思います。

銅剣の使い方および銅戈が頭の位置にあるということで、西といいますれば伊都、奴のいわば中枢部と、それからムナカタより東側、響灘、日本海、瀬戸内との関係が、その２つのあり方で示されましたけれども、それを２つ、東と西をムナカタがつなぐ位置にあったのか、それともどちらか寄りのほうが強いのか、その点を少し武器形青銅器の分析の点からお示しいただければと思います。

（吉田氏）長く話させていただきました。まずやはり、つないでいるのは間違いないと思います。その中で、このムナカタの立ち位置というのは、北部九州の中での位置付けというのが大きいのだろうと思います。私のいるような中四国とは格段の差があると思いま

す。そういう世界と、九州がつながっていくとき、大きな役割をこのムナカタの地域は果たしているのだろうと思います。

（板橋氏）石川先生のお話では、これは東と西を両面を見た扇のかなめの位置ということでありまして、ただ、吉田先生のほうは、中枢部から見れば東との門戸ということで、つないだというより、東側の文化、あり方を中枢部、西のほうに入れたというふうな理解でよろしいのでしょうか。

（吉田氏）そういう側面はもちろんありますが、その辺の比重は非常に難しいですね。時代によって多分変わるのだと思います。前半期というのは、西の文化要素を東に出していくときの出口だったし、中期の後半ぐらいは東の要素を取り込んでいくときの窓口であったというように、時代によってやはり立場も変わっていくのだと思います。

（板橋氏）そうすると、ムナカタ国の性格というのは、時代によって東から摂取したり、それを西に伝えたり、西から東のほうに伝えたりというような位置にあったということでよろしゅうございますか。

（吉田氏）はい、それで構わないと思います。

（板橋氏）分かりました。それから、次は高島先生にお願いしたいのですけれども、私はこの石畑遺跡を「ムナカタの吉野ヶ里」というふうにレジュメに書いておりますのですけれど、ちょっと高島先生には恐縮ですが、吉野ヶ里よりムナカタの石畑のほうが青銅器の数は、北墳丘墓に限っては多いということなんですけれども、北墳丘墓、吉野ヶ里と石畑を比較してどのように見られますでしょうか。

（高島氏）田熊石畑の青銅器ですけれども、僕は感心したのは、先ほど吉田さんの話もありましたけれども、日本に兵制があったかどうかというのを、昔、樋本杜人さんという朝鮮考古学の先生に聞かれたこと

があります。武器には長いものというか、槍のような、矛のような長い長兵、それから短兵、剣、つるぎですけれども、その組み合わせというものが日本であるかというのです。その時はありませんでした。だけど、それが出てきたのが福岡市の早良区の吉武高木遺跡ですよね。ああ、出てきたなと思って、そういう意味では、やはり海岸部に住んでいる人たちは、朝鮮半島とか、そういう所の兵制、武器の制度といいますか、そういうものを意外と敏感に受け止めているのではないかと思います。そういう意味で、矛があり、戈があり、剣が揃ってあるというのは、朝鮮半島的であると思います。

青銅器を掘るというのは、九州の考古学研究者の憧れであり、掘り当てることによって非常に満足感というか充足感を抱きます。では、吉野ヶ里の銅剣だけというのは何なのかですね。僕は先ほど申し上げたように、やはり剣というのは、これは私自身の説ではなくて、文化人類学者大林太良さんが、国づくりの神話の要素が３つあると言われたのですね。その中で、国づくりは、豊穣の神様ですね。多分稲とかそういう、神様でいえば大国主命です。それから、矛が要ると。そして、矛が、それは日本の神話にあるように、とろりとかき混ぜて、落ちたところが国土となる。天照大神に象徴される。それからもう１つは、素盞嗚尊の草薙の剣ですね。これは周りから火をつけられて、それで草をはらって、その地域の賊たちを平定した。そういう武力というか政治支配、この３つの神話要素が、これは東アジア的に存在するんだと、その一環としてやはり日本の神話も捉えるべきだという考えなわけですね。私も多分そうだろうと。

まず日本で最初に出てくるのは銅剣ですね。これは、地域にそういう政治的な社会、集団、国まではい

かずとも地域が政治化してくる。それに朝鮮半島の工人、技術者がその技術を持って渡ってくるわけですけれども、いろいろなほかの青銅器の製作技術も持ってくるということだと思うのです。

ですから、僕は、吉野ヶ里遺跡では銅矛も作っているのですね。近くでは銅戈も作っているわけですけれども、銅剣しか入っていない。やはり地域によってそういう銅剣だけに意味を持つ、政治的意図があったのではないかと見ています。田熊石畑のようにたくさん出てくるのはうらやましいですね。朝鮮半島の兵制に近いものが石畑にあると思います。僕はやはりその地域での青銅器の捉え方といいますか、それの違いがそこに現れていると思います。

（板橋氏）それでは、吉野ヶ里に関しまして、先ほどの高島先生の講演では、ムナカタを含む遠賀川から中流、上流域から筑紫、甘木、朝倉がつながって、吉野ヶ里というふうな文化的ルートがあるのではないかということをおっしゃっておりまして、例えば石包丁ですね。石包丁というのは稲の穂を手で刈っていく道具なのですけれども、例えば石包丁のあり方、ムナカタでは数が少ないとおっしゃっていましたけれども、ただ筑紫平野は農業国ではあるんですが、その辺の石包丁の出土の数、対比という面ではいかがでしょうか。

（高島氏）まだ正確に押さえていませんが、筑紫平野の方、立岩遺跡がある嘉穂盆地から南に冷水越えといいますか、峠を越えて筑紫平野に入った甘木地方は、各地に配布されている石包丁の約 25%ぐらいですね。それから、福岡平野もそれに近い数字があります。佐賀平野は、吉野ヶ里を中心に 10 数パーセント、15%ぐらいあります。それから遠賀川流域には、やはり同じぐらいあります。思ったほどないんですけれども、ただムナカタのほうは多分全体で５～６％ぐらいじゃないでしょうか。そこから見るとやはりその地域の生業、なりわいの違いがあるのではないか。いわば農業地帯と、それから漁撈、いわば対外交易地域ということだと思うのですね。

これは近世の事ですけれども、よく海岸部の所に登録される水のみ百姓の中に、田畑がないというのが結構いるんです。だけど、財力はすごくある。そういうのがいまして、それから見ると、やはり海岸部の人たちはむしろ海を通じた交易で栄えている。日本人というのは、農業の国なものですから、農業がどうかということで社会的な価値判断をしてしまいますけれども、交易というもののほうが、実は生産力は高いわけですね。財力を貯めることでは高い。そういう意味で僕はこのムナカタという地域はやはり海洋性、いわば海人（あま）族だと。九州の中央、筑紫の中央の脊振山の山頂の祭神が宗像三神の１人だったですね。それから、有明海沿岸に宗像三神、女神を祭る神社が、実は点々とあります。ですから、海洋、海人族というのは玄界灘にも広がっていますけれども、海岸を通じて有明海の周辺にも広がっていると考えられます。

その証拠として、吉野ヶ里遺跡の５㎞ほど南に貝塚があって、190 体ほどの弥生時代の人骨が出てきていますが、それは渡来系の弥生人と、在来系といいますか、西北九州型、海洋型の人骨というのが一緒の墓域を造ったりしております。ですから、そういう中で海洋族の中で比較的リーダー的役割を果たしたのがムナカタの一族ではないかと思います。当時どう言っていたか分かりませんけれども。

（板橋氏）それでは、吉野ヶ里は５㎞ぐらいに海洋的な遺跡はあるけれども、吉野ヶ里は大体内陸型で、ムナカタ国は海洋型ということが言えると。石包丁等々のことからということでしょうか。

それでは、そういう海洋民族、「海人」という言葉が出てきましたが、講演ではなく、今回討論で初登場の西谷先生に、レジュメで西谷先生はお書きになっておりますけれども、ムナカタ国に絞りますと、石畑遺跡が弥生の中期の前半ということで、その間、沖ノ島まで少し間があるのですけれども、ムナカタに、例えば吉野ヶ里の衛星中核都市、ないしは衛星集落といったような感じの遺跡の中から、石畑に続く有力な遺跡ないしは古墳というものがございますでしょうか。

（西谷氏）その前に、先ほどのご講演なり今の話を伺っていて、少しお話ししていいでしょうか。

高島さんのこの地域と嘉穂の石包丁の問題とか、あるいは筑紫平野の青銅器の問題、それとの関係、非常に興味深く拝聴したのですけれども、仮にその地域からの文化あるいは技術の流れがあるとしたら、やはりその見返りがあるはずですね。それもやはり、今ご指摘のように交易ということが大きいと思いますね。交易は海を通じて大陸につながるわけですけれども、対馬国を見た場合に、中心は漁業ですが、やはり交易が大きいですね。これは中世におきましても、「海東諸国記」にそう書いてあるのですが、対馬のなりわいとしては、漁業とそれから砂塩、塩づくりですね。そして、交易と書いてあるのです。そういうことから交易というのは大きいと思いますね。その一端を担うのが海人族ということでしょうが、そのような性格がこのムナカタ地域にもあったということは間違いないと思うのですね。

ただ、伺っていて少し気になるのは、対馬国は漁業を中心とした一つの地域社会で、次の一支国を見ると、これは漁業と農業が半々なんですね。これもやはり「海東諸国記」の中に、浦の半分は陸の農業で、半分は漁業だと書いていますので、農業と漁業から成っている一つの地域社会ということです。そういうのを参考にしますと、壱岐島の一支国という島の場合と、島ではなくても沿岸部で共通性があると思うのですね。

そういう意味では、このムナカタ国、ムナカタ地域についても、釣川がずっと内陸部に入り込んでいたと。そして、海に生きた海人族だという、これは誰でもおっしゃるのですけれども、と同時に、その奥まった所には、山のふもとに水田が早くから開けているわけですね。そういう意味では一支国と同じように、漁業と農業から成った一つの地域社会ではないかと、先ほど伺いながら思っていたのです。

そういう地域社会が一つの集団をつくって、それが『漢書』地理志や、『後漢書』『魏志倭人伝』に出てくる「国」と、中国が呼んだ地域社会ではないかと、そのように考えるのです。そのまとまりの最初を示す遺跡、根拠が田熊石畑ということで、あれだけ集中的に青銅器を保有しているリーダーがいて、リーダーに率いられた地域社会が生まれました。それを中国では「国」と呼んだわけです。

そして、田熊石畑につながる時代、つまり弥生時代の後期のころ、先ほど吉田先生も触れられておりましたけれども、そのころのムナカタ地域についての実態はよく分かっていなません。高島さんのお話によると、吉野ヶ里のような国の中心になる、これは中国の歴史書では「国邑」と表現していますけれども、そしてまた、その周辺に衛星集落があって、これは中国の歴史書でいうと「邑落」に相当するのですね。ですから、村々、つまり「邑落」が集まって１つの国を形成していました。その中心の拠点の集落、これが「国邑」であり、今流に言えば都ということになるわけです。ここのムナカタ地域におきましては、そういう吉野ヶ里のような「国邑」に相当するような中心集落の遺跡はまだ見つかっていません。そして、伊都国で申しますと三雲南小路、井原鑓溝、さらに平原という歴代の王墓が見つかっているのですが、それも見つかっていないのです。その辺が大きな問題というか、今後の課題で、私はどこかにまだ眠っていると思います。まだ未調査であるという、そう確信を持っています。

と申しますのは、その次の時代、胸形君の古墳時代になると、初期の前方後円墳が、徳重本村とか東郷高塚で出現しますからね。その時代の日本の地域は、お隣の岡の縣とか西の伊都の縣、さらにその西の末盧の縣という、縣（あがた）という地域社会になるわけですね。国が県になり、それが先ほど高島さんのお話にもあったように、律令時代には郡（こおり）となっていくのですね。そういう古墳時代、ヤマト王権の時代に前方後円墳がずっと造られていきます。そして

またお隣の岡の縣から類推すると、あるいは伊都国から類推すると、ここにも縣が置かれていたという、そのように考えます。

したがって、弥生時代の早いころの地域的なまとまりや首長の存在は、田熊石畑で裏付けられるのです。新しくなった古墳時代のことも、徳重本村や東郷高塚の前方後円墳で裏付けられます。その間が今のところ空白なんですね。資料的に空白ということであって、これは、私は将来いつか見つかる日が来るのではないかと期待しているというところでございます。

（板橋氏）今、西谷先生がおっしゃった壱岐は一支国ということで、レジュメの裏に『魏志倭人伝』が書いてありまして、それの９行目、10 行目で、この一大国（一支国）のあとに、最後に「亦南北に市糴（してき）す」とありますね。「市糴す」というのは交易するということなので、この一支国とムナカタ国が似ているということは、やはり交易ということを考えていいと。

もう１つは、奥のほうに畑があって、農と水、海で財をなした国、それがムナカタ国であるということが、今までの話から言えると思います。

それと同時に、中間が今ないと、弥生の後期がないと、そのあと徳重の古墳とか、石畑のすぐ近くにあります東郷高塚とかがあって、それがちょうど時代的には沖ノ島の祭祀につながっていくということでありますが、そのちょうど弥生後期ないしは終末期の遺跡は今のところ見つかっておりませんが、その時代の問題である邪馬台国問題に、それでは移っていきたいと思います。

邪馬台国問題は、今、お示ししましたレジュメの裏に道順といいますか、卑弥呼の女王国、邪馬台国に至る道筋が書いてありますが、これによりますと、不弥（ふみ）国ですね。だから、一支国の次が末盧国、その次が伊都国、その次が奴国、そして東行、東に行って不弥国と。奴国は福岡平野ですので、その東、不弥、これが国になりますが、実はこの不弥国には粕屋であるという説と飯塚であるという説がございます。これをどっち、どうなのかということを、九州説と畿内説で解いていくのですけれども、時間もあまりありませんので、なぜそれではそのムナカタ国が『魏志倭人伝』には一支国、不弥国のように登場しないのかと、そんな国があったら当然登場するのではないかというのが会場の皆様のご疑問かと思いますので、それを少し解いていただきたいかなと。

それで、不弥国がムナカタの隣の粕屋であった場合は、当然不弥国から南に行って投馬国と邪馬台国になるわけですから、不弥国の東にあるムナカタは登場しないということですね。邪馬台国の道筋ではないから、30 余国の中に埋もれているということになりますが、その辺はどうでしょうか、西谷先生。

（西谷氏）『魏志倭人伝』のみならず、『三国志』がそうですけれども、『三国志』の中で一番大事なのは外交関係なんですね。魏の使いが目指す所は邪馬台国なんです。その途中に投馬国に立ち寄るわけです。したがって、不弥国から次が投馬国、さらに投馬国から邪馬台国へ、その３つ以外の所、途中、随分いろいろな国を通っていくわけですけれども、それはいちいち書く必要がないということだと思っております。目的は邪馬台国、途中に強大な投馬国があって、その他ずっといろいろな国々があって、その横を通っていくのでしょうが、それらをいちいち書き出すと切りがないし、意味もないということだと思います。

（板橋氏）そういうことで、なぜ『魏志倭人伝』にそういう海洋および交易および農業の国、ムナカタのことが書かれなかったのかというのは、九州説で、かつ不弥国が宇美（うみ＝粕屋郡宇美町）の場合は、女王国に行くために政治的な目的で行くのだから、その東のほうは書いていないということで、『魏志倭人伝』にムナカタ国は登場しないということは理解できるのではなかろうかと思います。ただ、不弥国は、立岩がありました飯塚、嘉穂ではないかという説もありまして、当の立岩遺跡を高校時代に発掘されました高島先生、その辺は、九州説と不弥国の位置についてはいかがでしょうか。

（高島氏）僕は飯塚の出身なので、当然、不弥国飯塚

説、かつての穂波郡であろうと、周りはそう思っています。そのとおり思っております。

でもいいかなと思っているのは、あれから南のほうと書かれていますね。不彌国から南、に投馬国ですか、南に行くとするとちょうど筑紫平野に入るのですね。ですから、そういう意味ではいいかなと思っております。しかし、はっきり言って粕屋郡は捨て切れません。

僕は、今日ちょっと言い忘れたのですが、立岩の漢式鏡を実際、学生時代に掘りました。本当にびっくり、ほおをつねったくらい、夢かと思ったぐらいなんですが、多くの人があの鏡は奴国経由だと言う方がありますけれども、前から少し疑問に思っているのは、どうも鏡の質が違います。福岡平野、須玖岡本辺りで出てくる破片しかありませんけれども、見ていると、鏡の鋳上がりがよくないですね。ところが、立岩の漢式鏡は非常に鋳上がりがよくて、非常に角が立っています。これを何でもかんでも奴国に結び付けるということよりも、私は、あるいはこのムナカタに頼んで、ムナカタ一族によって、楽浪郡辺りから交易品としてもらってきたものではないか。それを立岩に、交易という形で持っていったのではないか。あるいはまた、立岩がそういうものとして要求して手に入れたのではないか。どうも立岩の漢式鏡というのは、遠賀川の水運、あるいはムナカタ経由で入ってきたものではないかと考えています。

（板橋氏）それでは、高島先生、講演で朝鮮半島に直接結びついたムナカタ族、および遠賀川流域ということをおっしゃっておりますけれども、不弥国を嘉穂説とすると、その立岩の鏡もムナカタ経由ないしはこの一円の勢力の経由で入ったのではなかろうかと、そういうことなのでしょうか。

（高島氏）僕は昔から気になっているのですが、福岡平野、奴国が常に中心で、そこからいろいろな弥生文化が周辺に広がっていくという、そういう見方が考古学者、特に九州の考古学者には強いです。何か権威主義的な物の見方でありまして、例えば熊本県に黒髪式土器というのがありますが、福岡のある偉い考古学者の方は、あの黒髪式土器は福岡の須玖式土器の影響を受けた極めて保守的な土器であるとか、何か常に福岡平野に中心を置いて物を見てしまう。僕はもっといろいろな、弥生文化にしても多元、多様に見て評価をしていかないとですね。そのつながりを、それぞれの地域の文化のつながりを明らかにしていくことは大事ですけれども、どこかに文化の中心を持って、それが広がっていってというような、そういう一面もあるかもしれませんが、こと弥生文化に関してはあまりそれを強調しないほうがいいかなと。そういう意味で、何も立岩の鏡を奴国のお世話にならなくても結構だと。石畑の発掘成果はそのことを物語っている。

（板橋氏）奴国のお世話にも、畿内のお世話にもならなくて結構だということでしょうね。

それでは、そういうことで、不弥国が隣にあっても嘉穂のほうにあっても、九州説では『魏志倭人伝』にムナカタ国が登場しないのは、今おっしゃられたような理由で明確に説明ができるということで、“合点！”ということになりますか。

ところで、先ほどから石川先生、吉田先生が縷々おっしゃっている畿内説に、高島先生は断固反対と講演の中でもおっしゃいました。その畿内説でムナカタ国が登場しない理由を説明しようとすると説明できないですね。なぜかといいますと、畿内説では不弥国から「南」という『魏志倭人伝』の記述を「東」に読み替えて、東のほうに行くのですね。考古学的には畿内説が有力なのですが、文献としては非常に解釈として、それはおかしいと。「南」を「東」に読み替えたら全部狂っちゃうと。だけど、仮にそれを「南」を「東」に読み替えるとすると、不弥国の「東」の場合はムナカタ国になるのですけれども、そうすると、当然、登場しなければいけないということになります。（九州説でもう一つ）不弥国が嘉穂であればその（ムナカタの）東に行っても、ムナカタは直接奴国から行ったので、女王国に行くためだから飛ばされたということは言えるのですが、そういう意味で畿内説ではムナカタ国が『魏志倭人伝』に登場しないことは説明できないと。九州説では明確に説明できると

いうことを、どっちの説をとられるにしても、皆さんここで了解といいますか、位置付けておいていただきたいと思います。

ところで、畿内説の場合は、投馬国は瀬戸内のほうとされる研究者が多いのですけれども、瀬戸内代表で吉田先生、いかがでしょうか。

（吉田氏）文献を素直に読めば確かにそうなのですね。ただ、やはりこれについては、先ほど西谷先生がおっしゃられたような形で、全てが記載されていないのではないかというように、私は考えております。自分が松山にいるものですから、松山は何か一国であってほしいというか、一国に値する力を持っていると思っております。そういった中で、邪馬台国当時の最大の遺跡を考えていくと、やはり畿内説の纒向を最有力候補と考えたほうがいいのではないかというのが、今の私のスタンスになります。

そうしたとき、その手前に書かれている投馬国について、私も、どちらかというと瀬戸内、それなら最大の吉備辺りを想定するのがいいのかなと思っていたのですけれども、瀬戸内というのを前提的に考えるのではなしに、日本海側の鉄器の状況とかを考えていますと、日本海側を回って行ったということも十分想定していいのかなとも思います。こちらでは私も関わっています出雲荒神谷、そのあとを受けたような形で、西谷の墳丘墓とか、出雲の大きな力が窺えます。邪馬台国畿内説の中でも、日本海側のほうに投馬国を想定する、その可能性が高いのでないかと、最近は思うようになっています。

（板橋氏）それでは、投馬国は瀬戸内海に限らず出雲、日本海側の可能性が畿内説では大きいということですね。それでは、九州説で投馬国を説明する場合はどの辺に想定されるかというのを、西谷先生か高島先生かどちらか…。高島先生、では、お願いします。

（高島氏）僕は九州説をとっています。いますが、九州説でもどこかというのは幾つもあるわけですね。吉野ヶ里もあるでしょうし、今の朝倉市の付近、それから福岡市を考える人もいますし、それから今の八女、あるいは瀬高、あるいは熊本県の山鹿であるとか、あるいは豊前であるとか、いろいろな考え方があります。僕は、九州だろうと言いながら、そしてある程度特定するとすれば、環濠集落が弥生時代後期後半に発達する有明海周辺で考えたらどうかと。吉野ヶ里もその１つに入るのですけれども、そういうことで考えていくと、そして先ほど不弥国を旧穂波郡、現在の飯塚に考えると、今の朝倉のあの一帯、甘木市から朝倉の一帯は一考に価すると思います。

あの地域は、古代の筑紫の本拠地を構成していますから、あの辺りに大きな政治的な弥生時代のファクターが存在すると。特に、あそこに平塚川添遺跡というのがありますね。あれは10ヘクタールほどありますけれども、あれは、僕はマーケット、市場のあるところではないかと。本当の本貫地は東側の台地に福田台地というのがありますが、そこに展開するすごい弥生時代の遺跡が、今いろいろな人が予想しています。そこに、実は吉野ヶ里のような巨大な集落が存在する可能性を多くの人が考えています。

だから、そういう遺跡のある所ですから、投馬国を甘木、朝倉一帯に考えてみたらどうかなというふうに考えています。

（板橋氏）分かりました。それで、少し会場からの質問にお答えしたいと思います。これは全員にと書いてありますね。少し時間がありませんが、先ほど石川先生が取り上げられました纒向遺跡ですね。畿内の説の有力遺跡だということで、纒向遺跡の最大の弱点は何かということで、（この質問に対し）畿内説の側から、自分の説を補強する纒向遺跡の弱点は言いにくいかもしれませんが、そこを何とか、せっかく東京からお越しなので、いい点と悪い点と言っていただければ。あと、また高島先生にも聞きますけれども、どうでしょうか。答えにくければ、別の纒向遺跡に関してお答えいただければと思います。

（会場の石川先生から回答）

（石川氏）弱点のみですね。

（板橋氏）質問はそうですね。

（石川氏）纏向遺跡を中心地と見る説の弱点は、纏向遺跡が突如出現するのですが、そこに至るまでの過程がまだ考古学的にきちっと説明できない点だと思います。奈良盆地中央にあって弥生時代をとおして中核的な集落であった唐古・鍵遺跡がしぼむのと歩調を合わせていることや、同じ河川沿いに近接することなどから、奈良盆地の弥生時代集落の再編と纏向遺跡の出現が連動するとみています。しかし、もう少し具体的な考古資料で、纏向遺跡が出現する過程や具体的に説明する必要があると思います。纏向遺跡の出現に付随する纏向石塚遺跡など前方後円形の墳丘墓―初期古墳とみる意見もありますが―についても、その成立過程は、瀬戸内地域で円形の墳墓に台形の突出部をつけたものから発展したものですが、纏向遺跡に登場するまでにまだ半世紀ほどの年代の開きがあります。弱点はまだたくさんあると思います。まだ決定打はないとみるのが適切で、期待が先行しているのも事実です。でもその期待は非常に大きい。纏向石塚やホケノ山などの前方後円形の墳墓から格段に大型で定型的な前方後円墳である箸墓古墳、さらにそれ以後の大型前方後円墳が継続的に大和古墳群で築造されるプロセスは、皆さん、合意しているかと思いますけれども。

（板橋氏）ありがとうございます。なかなか謙虚なご説明でございました。それでもう１つ、吉田先生に少し質問で、武器形青銅器文化と銅鐸文化が統合されているところが、少し分かりにくいので補足ということで、時間もありませんので簡単にお願いします。

（吉田氏）銅鐸も武器形青銅器も前方後円墳には絶対入ってこないのですね。弥生時代で終わってしまうのです。でも、唯一、鏡だけは弥生時代からずっと連綿と持っていて、古墳時代に引き継がれていきます。そこには、銅鐸で西日本一帯を統一できない、あるいは武器形青銅器の銅矛で統一できない、そういう限界というのが青銅器祭祀にはあるのだろうと思います。その祭器としての性格は、銅鐸は文様をしっかり鋳出した器物として、祭器としてあがめられた。銅矛のほうは、武器としての鋭さ、金属光沢故にあがめられた。それを実は、鏡というのは両面で併せ持つことができ、かつ漢の王朝に起因するような威信財性というのを持っていた。だからこそ、古墳時代に引き継がれていったのだろうということを、少し図式化したものでした。

（高島氏）鏡とそのほかの青銅器つまり銅鐸・銅剣・銅矛・銅戈とは祭器としての根本的な違いが、僕はあると思います。鏡は、僕は祖霊神がよりつく祭器だと思います。ほかの銅鐸なり銅剣、銅矛、銅戈というのは、もろもろの神々ですね。空の神だったり水の神だったりいろいろな神々、これは縄文時代からある日本人の根源的な信仰なのですけれども、新たに鏡が何でああいうふうに採用されていくかというと、先ほど国というものが成立する段階で、私は祖霊信仰というのが新たに成立して、それが支配的な一つの秩序として広がっていくと。その祖霊を映す依りつくものとして鏡が存在する。

ですから、この鏡とほかの祭器が一緒に埋められることはないですね。別に扱われる。それが古墳時代に引き継がれる。よくたくさんの鏡が棺桶の外側に置かれたり、鏡が棺桶の中に置かれたりするわけですけれども、棺の外に置かれているのは、僕は供献されたもの、献上されたもの。何で献上したかというと、自分たちが信仰する祖霊神の祭祀を、その被葬者に委ねるという意味があるんですね。また、その鏡は祖霊神の託宣を受ける聖なる権威を持っている。そういう意味合いで、やはり弥生時代に成立した祖霊信仰というのがより高められる形で、古墳時代に引き継がれているというふうに見ています。

ですから、鏡とほかの青銅器が一緒に埋められることはない。ほかの青銅器は、一緒に埋められることはありますけれどね。

（板橋氏）分かりました。それから、これは九州説、畿内説にかかわらず、初期古墳ないしは大和の定型古墳に副葬される鏡、剣、玉、「三種の神器」ですけれど、これは弥生時代の九州の葬制であると。後期に

若干様態が変わってきますけれども、それがなぜ畿内に入るのかということが、畿内説への疑問になるかと思います。

時間もありませんで、まとめもできませんから、ここで皆様会場の方に、邪馬台国は畿内か、九州か、どっちか拍手をもってですね。これを提案したのは、もちろん、高島先生なんですけれども、畿内に行っては九州説の拍手の少なさにがっかりされている。まあしかし、それはいずれにおいても会場の方に拍手をもって、九州説ないしは畿内説を支持していただきたいと。

それではまず、邪馬台国は畿内と思われる方は拍手をしてください。

（会場「拍手」）

それでは次に、邪馬台国は九州と思われる方は拍手を。

（会場「拍手」）

圧倒的とは言いませんが、九州説のほうが多かったように聞こえます。しかし、畿内説の吉田先生も、石川先生も、九州説の高島先生も、皆さんの拍手に、にこにこ笑ってお応えしておられましたので、これからも論議はにこにこ笑いながら続けていただくということになるかと思います。皆さんもご研究されたらいいかと思います。

これで、討論を終わります。

（会場「拍手」）